養泉寺

養泉寺は、東京上野にある天台宗の寺院、寛永寺の系列の寺院です。養泉寺は、この地域の巡礼路である「最上三十三観音」の第 25 番の寺です。「観音」とは、慈悲の菩薩である観音菩薩のことです。有名な俳人・松尾芭蕉 (1644～1694 年) は、1689 年、江戸 (現在の東京) から日本の北部地方まで、156 日間の旅をした際、ここに 7 泊していきました。芭蕉は、弟子の河合曽良 (1649～1710 年) とともに旅をしました。2 人の旅は、芭蕉の最も有名な作品のひとつである「おくのほそ道」（北の奥地へのせまい道）の題材となりました。旅の途中で 2 人は尾花沢に立ち寄り、芭蕉の友人で裕福な地元の商人・鈴木清風 (1651～1721 年) を訪れ、尾花沢に 10 泊しました。境内には、芭蕉が滞在中に詠んだ詩と彼の生涯について彫られた石碑「涼塚」があります。

涼しさを　　涼しさを
我宿にして　　自分が横たわる住居にして
ねまるなり　　すっかりくつろいでいる

(ドナルド・キーン訳)

養泉寺の建立年は不明ですが、1688 年に改修され、1895 年に焼け落ちた後再建されました。この寺からは、のどかな田んぼと、遠くにそびえる月山・鳥海山を眺められます。